

男の子四人の働く母ちゃんをつぶやき
～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～



大阪府立大学工業高等専門学校

中谷 敬子

本書はJCC 会員向け会報『キャリアカウンセリング』の2015年1月第90号から2015年9月94号に掲載された5回シリーズのコラムより、第1回、第2回を一般公開したものです。

男の子四人の働く母ちゃんのつばやき ～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～ (第1回)

■ 挫折がいつもチャンスにく大学入試～就職まで>

《大学入試失敗》

人にはそれぞれ、人生の方向性を決めるきっかけがあっただろうと思います。私の場合、挫折が新しい必要なステップへのチャンスのように思います。

最初の挫折は、大学入試のための共通一次(現在のセンター試験)。希望する大学で物理を学びたかったのですが、自己採点では到底足りず。高校の担任は、「志望大学を選ぶか、物理を選ぶか」と問いました。結局、物理を取りました。当時名前も知らなかったその大学が私の生き方の価値観を育ててくれました。1924(大正13)年に創立された大阪女子大学は全国で2番目の公立女子専門学校(女子専)です。「女性学」という科目が必須科目であり、教員も女子専を卒業して、京都大学や大阪大学で学位をとって、母校で教鞭をとっておられる方も多く、「女性も責任ある仕事を持ち社会に貢献すること、誇り高く生きること」を、実践と教育の両面から私達に教えてくれました。

《合気道師範との出逢い》

学力が足りず、第一希望の大学に行けなかった。そんな事は大了なことでもなく、すぐに乗り越えられる挫折と思われるかもしれませんが、自分の取り柄は勉強しかない思っていた18歳は、小さくない喪失感を味わいました。友もいてそれなりに楽しい大学生活の中にあっても、自分の中に支えを探しました。入学当初は、中学から続いていた卓球部に所属します。理由は不純で、「経験者だから楽にレギュラーの座につけるだろうな」。実際、団体戦出場人数ギリギリの小さなクラブだったこともあり、祭り上げられるレベルで大切にされましたが、ずるい自分が嫌でたまりませんでした。卓球部の隣では、合気道部が楽しそうに稽古をしていました。合気道部は5月GWに新入生歓迎合宿が予定されていました。転部するならその時期までが限度。義理と想いが葛藤しました。仲のいい友達が既に合気道部に所属していたことも助けになって、思い切って、卓球部を退部し、合気道部に入部しました。運動神経もなく自信もないのは変わりませんが、やっと自分の大学生活がスタートした気がしました。

合気道部では、年に数回の宿泊稽古に、東京から神主でもある佐々木将人師範をお迎えしていました。この師範との出逢いは大きな節目でした。60歳近くになっていた師範は、合気道の稽古だけでなく、日本神話、精神性(スピリチュアル?)などの話を沢山してくださいました。それは私が全く聞いたことのなかった世界でした。全員集合の場での師範との問答(?)の時間は名物でもあり楽しみでもありました。今思えば、まさに「オープンカウンセリング」でした。禅問答のような質問の投げかけもあれば、心に抱えている悩みが出されたりもしました。私は、「死ぬのが怖い」「自信が持てない」。そんなことを質問しました。「死んでから考えても間に合うだろ?今を

生きなさい」とか「心配は消極的観念と取り越し苦労だ」というような、率直で明確で、本当に気が楽になる回答もあれば、持ち帰って考えさせるような回答もありました。2年の月日をかけて私を変えてくれた回答は「自信がない」についてのものでした。潜在意識について話を信じがたい様子で聞く私に「毎日寝る前、起床直後に布団の中で「私は〇〇できる」と言ってみなさい。潜在意識が叶えてくれるよ」と師範はおっしゃいました。「科学至上主義」だった私には、「いくらなんでもそんなはずない」と思いました。でも、もし本当にそうだったら、もったいない話だとも思い、『有り得ないけど、明確に達成したかどうか分かる事柄』として「私は主将になる」と言ってみたりもしました。また、書家でもある師範は合宿の度に、沢山の色紙を書いて下さり、合宿最終日に、一枚ずつみんなに下さいました。裏返して山積みしてある色紙から内容を見ずに一枚引くのです。参加者が何をもらうのか、自分に何が来るのか、ワクワクしたものでした。



「不思議と今の自分に合ったものが来るのよ」という先輩の言葉に、1年の夏合宿で私が引いた色紙は「笑へ」(写真参照)でした。正直ガックリきました。みんな、「人生山河」「味覚人生」「使命」等、カッコいいのをもらっているのに、私はこんなつまらない言葉なんて、、、。当時はそんな風に思いました。今思うに、まさに、私に最高にぴったりの素敵な言葉だったんですよね！そんな風にして、大好きな合気道を中心に私の大学生活が回り始めました。合気道部最優先で、クラブに遅れたくないから実験実習で残されないように予習しました。年に数度の師範の話は、繰り返し繰り返し、「心の持ち方が人の人生を決めるんだ」ということを伝え続けてくれました。そんな合気道どっぶりの2年のある日、駅から大学まで歩いている時、ハッとしました。「視界に足がない」ことに気づいたのです。そうなんです。私はずっと下を向いて歩いていたので、視界の下のところに、いつも、自分の歩く足が左右交互に見えていたのです。この気づきに、「私は変わったんだ」そう実感しました。そして更に1年後、一番下手くそで、クソ真面目で心配性の私は、主将になりました。初段の免状とともに新しい私を頂いたと思いました。

《実験物理から理論物理。そして、学部卒で就職活動へ》

卒業研究は念願の物理教室へ。しかし、私は全く実験に向いていませんでした。実験は二人ペアで行います。ゼミ生は3人でしたが、みな私と組むのを恐れていました。個人でできる試料作成をすれば、酸素ボンベのバルブを逆に回してしまい、酸素漏れで実験棟全体にひと騒動巻き起こし、何をやってもうまくいきませんでした。絶望と無力感の中、夏休みに入る前には、テーマ変更を希望します。最終的には、数年前に京都大学から着任された東村武則先生の研究室で、コンピュータを使った理論物理のテーマに携わることになりました。プログラミングはとても面白く、それまでの反動もあって夢中になりました。親に、振袖も要らぬ、卒業旅行もしないと頼み込んで、コンピュータとプリンターを買ってもらいました。夜中に印刷するとうるさくて寝られぬと不評のラインプリンター、懐かしく思い出されます。研究室には卒研究生は私一人でした。レベルの高い大学から来た先生は、私の低いレベルを受け入れがたく、「できなくても努力することが大切だ」という甘い私に研究の世界は違うのだと叩き込みました。私は、好きなことに対して一生懸命取り組みはするけれど、人間的には、わがままで、思い込みが激しく、かなり癖のある、

やりにくい学生だったと思います。先生とは沢山の話をしました。物理(学問)に対する姿勢、生きる姿勢・哲学、信念、そういったものを先生から教わったように思います。先生には、その後、就職してから、会社を辞めて大学院へ行きたいとの突然の相談にも載って頂き、大変お世話になりました。先生がおられなければ、今の私はありません。

当時、母校には大学院がなく、希望する人は、他大学へ進学していました。「大学院へ行ってみるという道もある」とのお話があったのは、学部4年のある日のことでした。思いがけない道に大喜びで親に相談すると、「あなたにそんな能力もないし、資金も無い」と一喝。自分自身も、そうだよなあと思って、あまり悔しい思いもせず、納得。学部卒業での就職活動を始めました。



男の子四人の働く母ちゃんのつぶやき ～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～ (第2回)

就職・退職、進学、結婚、 再就職（仕事と家庭、そして、自分との両立）

■通らさぬは通すがための道普請＜就職～進学・結婚まで＞

《 キャリアのキャの字も考えない就職の先にあるもの 》

大学学部4年生の時、ゼミの先生「大学院に進むという道もある」の言葉に、一度は進学を望んだ(夢見た?)ものの、親からの反対の一言に、「だよー」とあっさりと学部就職を決めた1990年。バブル真っ盛りでした。就職も引く手あまた。「研究を仕事にしたいな」という軽い気持ちで、大阪の研究所での就職を選択。志望動機の作文、面接練習などの就職活動の苦勞も覚えがありません。当時はそれなりに真剣に考えただろうけれど、何を考えたかも覚えていない程度ですから、大した苦惱もなかったものと思われまます。理論物理から一気に機械工学の分野へ、何も知らずに飛び込みました。持っているスキルはプログラミングとコンピュータを使う能力だけ。しかし、そこでは自らプログラミングする必要はなかったのです。すでに確立された解析手法である有限要素法のソフトを使っての構造物の強度評価が私の主な仕事でした。機械工学の基本科目である材料力学を研究員の人に教えてもらいながら学びました。上司は「学びに2年」と学ぶ時間をたくさん与えてくれました。とてもありがたく、恵まれた環境だったと思います。製鉄所、ダム、造船工場。たくさんの経験もしたし、論文も書きました。しかし、次第に、私の中で、大学で身につけた物理的なアプローチへの想いが大きくなって行ったのでした。

私の会社での仕事は、コンピュータを使って数値シミュレーションを行い、設計段階、または、実際に作られた構造物の性能が十分か予想したり、確認したりすることでした。シミュレーションから得られた数値データをもとに、所属チームが、よりコストダウンできる構造を提案したりするのを嬉しく思いもしました。それでも、このような事業部研究に携わりながら、私は、自身の学生時代の基礎研究のように、「なぜ、そのような現象が起こるのか？」という「メカニズム」を考える視点を大切にする研究に取り組みたいと思っていました。結果として出てくる「数値」ではなく、その「理由」を考えたいと強く思いました。そのための研究提案もしました。しかし、企業向きの研究でないこと、提案者自身の力不足を理由に却下されました。今のままではだめだ。自分のやりたいことは他にある。工学を学んでいない自分の力不足は痛感していました。学び直したいと思いました。追い詰められました。25歳のいわゆる年頃の娘の「退職して、大学院に進学したい」という突然の申し出に、大企業に就職させて安心していただであろう両親は困惑しました。地方にある親の実家の叔父のところ連れて行かれました。

叔父からは、「頭でっかちの女の子に嫁の貰い手はない」と、厳しい叱責を受けました。母も、娘に高い教育を与えたことを責められていたように思います。時代錯誤の経験に、言い返す勇気も表現力なく、ただただ黙ってうなだれてみせるしかできない自分が情けなかったです。平成の世に、死語だと思っていた叔父の言葉に、まさか自分が会おうとはと、その衝撃の方が大きかったです。皆が、良かれと思っての関わりだった分、このプロセスは辛かったです。貴重で大切なものでした。自分の強い気持ちを確認することができたからです。会社では、退職の意思を曲げない私に対して、室長は「破滅的な人生を歩むだろう」と捨て台詞を残しました。それでも、応援して送り出してくれる人もいたことは救いでしたし、この会社では学問的にもキャリアの面でも多くのことを学ばせてもらい、のちの人生に影響を与える種をたくさんもらいました。会社、そして、一緒に働いた方々に感謝しています。結局、仕事を辞めて、大学院で学び直すことに決めました。企業経験は3年でした。



《 やっと見つけた大学院の受け入れ先からの突然のお断り 》

企業での研究生生活は、やりがいのあるものでした。「なぜ？」というアプローチの研究には携われなくても、ゴミ焼却炉の煙突の鉄筋コンクリートがどんな力を受けているのか、とか、ダムの止水栓の設計や放水時の止水ゴムの振動の様子を知ることができるのは、とても興味深いことではあったのです。事業所研究をしながらも、「なぜ」を追いかける、自分にしかできない研究をあきらめる気持ちにはなれませんでした。(現状では) 不要だと言われれば言われるほど、大切だという気持ちは強くなりました。いつか、そのような研究を仕事とするために、研究員時代2年目頃から、現象が起こるメカニズム、「なぜ？」を追及する具体的な方法として、分子動力学法というシミュレーション手法に目をつけ、勉強し始めました。週末や、有給休暇を使って、学部時代の指導教員であった東村武則先生に手ほどきを受けました。所属を会社においたままで学会発表もしました。紆余曲折ありながらも、会社の上司も、調査研究として、月に1度だけ、東京大学に研究相談に行くことを認めてくれました。しかし、この研究は、会社での本来業務になる見込みはありませんでした。仕事を続けながら大学院探しをはじめました。卒業したゼミの先生も協力して下さいました。やっと、大学院入試に合格したら受け入れてくれる大学院(研究室)を見つけました。会社へは退職の意思を伝え、退職の交渉が始まりました。辛いこともありましたが、大学院入試の勉強でそれを忘れることができました。ところがある日、受け入れ予定先の大学院研究室の先生から、「仕事を辞めずに受験してほしい」との突然の申し入れがありました。全く違う分野の受験勉強で仕事の時間も惜しいのです。両立などありえません。大学院の研究室探しは振り出しに戻りました。

その頃、東京大学の先生から、分子動力学法をしたいなら、大阪大学の北川浩先生に師事を仰いでどうかとご提案をいただいて、仕事で、何度か北川研究室にお邪魔していました。北川先生は、分子動力学法の草分け的な研究活動をなさっておられました。背水の陣の私は、向こう見ずにも、北川先生に、大学院進学希望を伝えました。当然のことながら、私の申し出に対し、北川先生の当初の対応は、会社に残るほうがよいという慎重なものでした。それは、私の人生を、親身になって考えて下さったことでした。最終的には、短期間の受験勉強ではとても

大学院合格はかなわず、1年間研究生として研究室で勉強することになりました。院生にはなれず、まず研究生からと決まった春、OGとして参加した合気道合宿でもらった色紙には、「神意通らさぬは通すが為の道普請」とありました。「通さないために通行止めにして道路工事をしてい



《 結婚、学位取得、就職先がない！ 》

ドクター2年のときに結婚しました。パートナーは、同じ研究室の助手でした。甘いロマンスをイメージするかもしれませんが、当時、私は全く結婚願望が無かったのです。というよりも、結婚は敵だと思い込んでいました。日本物理学会の初代女性会長の米沢富美子さんの大ファンで、すべての著書を愛読していながら、「結婚」か「研究」か、どちらかしか選べないと思い込んでいて、そして、私は「研究」が全てで

た。学位取得と、生涯現役で研究生活を送ることが人生目標でした。人生で研究を選ぶと、会社を辞める時に決めていました。一か八か、白か黒かの思考回路の私でした。ところが、私が壁があったらぶち当たって勝負に出るタイプであるのに対し、パートナーは、いつも自然体で、壁さえも受け入れて自分の人生の一部にしてしまうタイプ。口数は多くないけれど的確なことを言います。結婚を話し合う中で、「研究者も幸せになる権利がある」という彼の名言で、私の思い込みは消し飛びました。さらに、結婚に至るまでのプロセスで、様々なはっきりしない多くの事柄に、白黒ハッキリしたいタイプの私は度々立ち止まりましたが、パートナーの母の「流動的なことは沢山あるのだから、その時その時を一生懸命考えて決めればそれでいい」という言葉で、迷いを抱えながらも前向きに進むという姿勢を知りました。この言葉は、私の大切な言葉の一つです。そして結婚。研究生を経て大学院生となり、結婚してなお研究を続け、学位取得するに至るまでの4年間は、大切な人達に囲まれながら好きな研究に好きなだけ没頭できた充実した時期でした。ドクター修了の年、次々と就職先が決まる同期に比して、予想通り、私は就職先が見つかりませんでした。「30歳」「女性」「既婚で子どもはまだ居ない(=これから産む可能性大)」と来れば、当然のことでした。当時はまだ研究教育職も年限つきでないものがほとんどでしたが、「女性なのだから、夫の仕事を支えるべく、年限つきで勤めてはどうか」という話もされたりして、辛かったです。私たち夫婦の価値観を考慮しない「内助の功」を諭されたり、妻として、将来の母としてあるまじき論を展開されるのも苦しかったです。パートナーの母は、田園と日本古来の伝統文化が多く残る地域の専業主婦で、そこにあって、自分として生きる芯を持った、私が尊敬してやまない女性です。私の研究への想いを理解してくれている人でしたが、その義母に「修了したし、戻ってくる？」と笑顔で聞かれた時には、非常にショックを受けました。日本の常識・文化の洗礼でした。両親達も大切にしたいが、自分自身の想いも守りたい。それはどうすれば実現できるのか、考えさせられました。ちなみに、義母は今も強力な応援団の一人です。

その後も、就職活動を続け、偶然にも学会講演を聴いてくれた研究者からの声掛けをきっかけとして、幸いにも、大阪府立大学の助手に採用されました。
(第3回に続く)